

---

# 乗り過ごし

木俣収

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

乗り過ごし

### 【Zコード】

Z2410D

### 【作者名】

木俣収

### 【あらすじ】

最終電車を乗り過ごしした男が降りた駅。そこにあった・・・

その男は、会社帰り散々に飲んだ。

そして、終電に乗り、眠つてしまつた。

気が付くと、電車は男が降りる駅のひとつ向こうの駅に停まつて  
いた。

男はあわてて降りる。

「しまつたなあ。寝過ごしちゃつたよ。」

終電は行つてしまつた。

「そういえば、小さなこころからこの辺りに住んでいるけど、この駅  
で降りたのは初めてだな。」

タクシーを拾おうと、寂れた駅の外に出る。

すると、駅の斜め向かいに、小さなバーの明かりが見えた。  
「まだ、やつているのか・・・。もう少しだけ飲もうかな。  
その明かりに誘われるよう、男はバーの扉を押す。

「いらっしゃいませ。」

店のなかは、ママが一人いるだけで、他に人はいなかつた。  
そのママは30歳過ぎくらいで、少し化粧は濃いが、なかなかの  
美人だつた。

「まだ、いい？」

「ええ。どうぞ。」

カウンター席に座り、水割りを頼む。

「お久しぶりですね。」

「え・・・。」

男は少し驚いたように彼女を見る。

「初めてのはずだけ。」

「もう、そういう冗談がお好きね。」

なるほど。これは、ママの冗談なのだ。そう合点した。

男はそれにのつてみることにしてみた。

「そりなんだよ、下手な冗談でね。」

「ふふふ。」

グラスを回しながら、常連のふりをして会話を弾ませる。

そんな会話が一息ついたところで、男が言つ。

「そりいえば、この辺りは駅の改築で、立ち退かなくつけない  
んじやないのかい？」

「ええ、そりなんです。」

「じゃあ、ここも？」

「はー。もうすぐ閉めるんです。」

「そりか・・・。」

しばしの沈黙が続く。

「初めて来た店だけど、なんだか寂しいね。」

「もう、またその冗談ですか？ それがお好きね。」

「え、いや、だから・・・。」

どうも、彼女の態度からして、本心で男がこの店に来たことがあ  
ると思つてゐるようだつた。

でも、男には全く覚えがない。

他で出会つたのだろうか。

いや、彼女のような美人を忘れるはずがない。

「どうなさつたんですか？」

「いや、いいんだ。もう行くよ。」

立ち上がり、会計を済ます。

ドアを開け、出て行く男に彼女は深々と頭を下げて言つ。

「長い間、ありがとうございました。一郎さん。」

外に出た男は、タクシー乗り場に向かつて歩く。

いちろり・・・。

ちよつとまで、今、一郎つて言つたが。

一郎は、おれの親父の名前じゃないか。  
つい、この間亡くなつた。

振り返つて、さつきの店を見ると、さつきまで明かりがついてい

たとは思えないほど、暗くひつそりとたたずんでいた。

「飲みすぎたのかな。」

停まっているタクシーに乗り込み、行き先を告げる。

静かに、タクシーは走り出す。

初老の運転手はバックミラー越しに男を見て囁く。

「お久しぶりですね。」

「え・・・。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2410d/>

---

乗り過ごし

2011年1月16日01時03分発行